芸大通信

2006年11月発行
Vol.007

京都市立芸術大学広報誌

KCUA NEWS

CONTENTS

音　楽　学　部・ガラ・コンサート
・音楽学部各専攻事業紹介
日本伝統音楽研究センター・日本伝統音楽研究センター事業紹介
芸　術　資　料　館・収蔵品展紹介
・卒業生の近況紹介
・音楽学部長新任紹介
・日本伝統音楽研究センター所長再任紹介

発行元：京都市立芸術大学全学広報委員会　〒610-1197 京都市西京区大枝沓掛町13-6 TEL.075-334-2200

Professors' GALAについて

音楽学部長／音楽研究科長　呉　信一

増井　信貴

三井　ツヤ子

松本　日之春

呉　信一

久合田　緑

上村　昇

山本　毅

松田　康子

福島　明也

四方　恭子

大嶋　義実

坂井　千春

北村　敏則

上野　真

今回の演奏会は，音楽学部・大学院が今までに開催した演奏会とひと味違います。今までの演奏会ですと，当然のことながら学生が出演し，学外に向けて，その実力をアピールしてまいりました。例を挙げますと，ピアノ専攻の優秀な学生による「ピアノ・フェスティバル」，小編成のオーケストラでモーツァルトを演奏する，「モーツァルトをぶっとばせ？」シリーズ，あるいは京都国立近代美術館ホエワイエ・コンサート・シリーズ，京都コンピュータ学院共催シリーズ，京大時計台コンサート・シリーズなど，一連の取り組み，定期演奏会，大学院オペラなどがあります。

しかし，今回の演奏会は，京芸の教授陣が主役です。数多くの優秀な音楽家を輩出する京芸ですが，その才能ある若者を育てる先生方も，指導者でありながら，第一線で活躍する音楽家であります。その我々もぜひ学外へ向けて京芸をアピールしようということで，財団法人京都市音楽芸術文化振興財団の全面的なバックアップを受けて，今回の演奏会があるのです。まず，ピアノと声楽の先生方はそれぞれソロの演奏をされます。管楽器，弦楽器は編成の都合もあり，イベールの「室内管弦楽のためのディヴェルティメント」を演奏いたします。ここには教授陣だけでなく，音楽界の時代を担う若い卒業生も入ります。本来ならば，教授陣全員が出演するはずでしたが，都合のため，完全に全員が揃うことにはなりませんでした。しかし，京芸が全力をあげた演奏会です。きっとすばらしいものになるでしょう。

本演奏会の開催にあたり，皆様の深いご理解とご協力をお願いすると同時に，より多くの方に演奏会に足をお運びいただき，京芸の凄さを感じていただきたいと願っております。

【プログラム】

J.S. バッハ：プレリュード（無伴奏チェロ組曲第1番ト長調BWV1007より）
　　チェロ＝上村昇
W. A. モーツァルト：すみれ
　　クローエに寄す
　　歌劇「コシ・ファン・トゥッテ」より“恋の息吹は”
　　テノール＝北村敏則
　　ピアノ＝松田康子
F. リスト：喜びに満ち，悲しみに満ち
　　ラインの美しき流れのほとり
　　君は花のごとく
　　ローレライ
　　メゾソプラノ＝三井ツヤ子
　　ピアノ＝坂井千春
松本日之春：ピアノの為の狂詩曲　第4番，第5番
　　ピアノ＝松田康子
滝廉太郎：荒城の月　（詩：土井晩翠）
中田喜直：木蒐　（詩：三好達治）
　　バリトン＝福島明也
　　ピアノ＝松園洋二
J. S. バッハ（ブゾーニ編曲）：シャコンヌ（ヴァイオリンの為のパルティータ第2番BWV1004より）
　　ピアノ＝上野真
J. イベール：室内管弦楽のためのディヴェルティメント
　　指揮＝増井信貴
　　Fl.　大嶋義実　　Cl.　高橋知巳　　Fg.　中野陽一朗
　　Hr.　村上　哲　　Tp.　菊本和昭　　Trb.　呉　信一
　　Per.　山本　毅　　佐々木藍子　　神原聡美
　　Vn.　久合田緑　　四方恭子　　木村和代　　梅原ひまり
　　バブアゼ・ギオルギ　　大谷玲子
　　Vla.　山本由美子　田代直子　木田佳余　谷口いづみ
　　Vc.　上村　昇　　江口陽子　　岩田彩子
　　Cb.　坂田晃一　　石井絵実子
　　Piano et Clesta　坂井千春

2006年11月24日（金）　19時開演（18時開場）
京都コンサートホール　大ホール

音楽学部各専攻事業紹介

指揮専攻

■指揮専攻

他の音楽大学ではあまり機会がなく，本学において多く設けられていることに，学生（指揮専攻生）に数多くの定期演奏会（冬期開催のみ）をはじめ指揮の実習があるということです。

大学主催のアンサンブルの指揮，又は作曲専攻主催による音楽会の指揮など，年間を通じて，実習することにより，大学に在学中から，レパートリーの形成と演奏者とのコミュニケーションを実地体験することができます。

本年度（2006年度）はオーケストラ演奏旅行にも同行して一部を指揮しました。又，授業においても定期演奏会の副指揮者，大学院オペラのアシストなど，指揮をする機会はたくさんあると思います。

もちろん卒業試験はオーケストラによる公開演奏会です。

管・打楽器専攻

■管・打楽器専攻

本学管打楽専攻では，学内外で多くのコンサートを開いています。ここでは今年度京都市内各地でのコンサートについて紹介させていただきます。

6月25日には地元西京区にあります京都市西文化会館「ウエスティ」にて「ウエスティ音暦～初夏～管・打楽専攻生によるアンサンブルコンサート」を開催いたしました。親しみやすいプログラムのコンサートで，金管楽器や打楽器のアンサンブルで映画音楽メドレー，ルロイ・アンダーソンの楽しい名曲等を演奏して大変好評でした。

11月1日には，北文化会館で『モーツァルトをぶっとばせ？』第二夜、木管楽器主体によるアンサンブルで，モーツァルトと彼を取り巻く作曲家たちの作品を集めたコンサートを開催いたしました。楽しくさわやかな息吹の木管楽器アンサンブルをお楽しみいただくとともに，ちょっぴり通好みの音楽史エピソードも知っていただこうと，多少アカデミックなコンサートでした。

さて今年度，もう一つのコンサートが予定されています。1月13日（土）午後6時，京都国立近代美術館ホワイエにて「ニューイヤーコンサート」です。

この日は再び金管アンサンブルと打楽器アンサンブルが登場いたします。本学金管楽器・打楽器専攻生たちは「聴衆の皆様に何が何でも楽しんでいただこう！」というサービス精神を常日頃モットーとしており，この日のコンサートにもラグタイムなど楽しい曲目が目白押しです。近代美術館というロケーションもあり、目と耳の両方で楽しんでいただけることでしょう。

学生によるコンサートといっても，彼らの実力はプロの水準まで紙一重のところに迫っています。楽興の時を過ごしていただけることと存じます。また、その「紙一重の壁」を越えるためには聴衆の前での経験が何よりの糧であり励ましです。今年度のみならず，今後もどうかお誘い合わせの上ご来聴賜りますようにとお願い申しあげます。

弦楽専攻

■弦楽専攻

酷暑の夏もようやく過ぎ，秋のコンサートシーズンがやって来ました。10月11日には北文化会館で，テーマコンサート「モーツァルトをぶっとばせ？」第一夜として弦楽専攻生によるモーツァルトのヴァイオリン協奏曲第3番，ハイドンのチェロ協奏曲第2番などが演奏されました。10月15日には京響創立50周年記念事業としてジョイントコンサート「京響と若き音楽家たち」が開かれます。京響・京都芸大・京都市立音楽高校が共演してベルリオーズやホルストなどのオーケストラの名曲の数々と，松本日之春教授のファンファーレ「黎明」が演奏されました。その後11月3，4，5日の芸祭をはさんで，12月10日の京都コンサートホールでオーケストラの定期演奏会，12月23日の「国立近代美術館ホワイエシリーズ」クリスマスコンサート（弦楽四重奏の名曲の夕べ）と続きます。コンサートからコンサートへと学生たちは練習に余念がありません。昨今の学内外での学生たちによるコンサートはどれも非常に高水準のもので，どこに出しても恥ずかしくないものばかりです。彼らの若さ溢れた清冽な演奏を少しでも多くの方々に聴いて頂きたいと思っています。秋から冬の夜長，京都芸大生によるコンサートにどうぞお越し下さいませ！

音楽学部各専攻事業紹介

作曲専攻

声楽専攻

ピアノ専攻

■作曲専攻

作曲専攻はクラス構成では，大学で可能な創作領域で作品を制作し，常に演奏されることを前提に年間に以下のように数多くのイベントを行っています。

① 作曲専攻全学生対象の学内でのピアノ作品による作曲作品研究発表会。これは1回生から参加できるコンサートで，ピアノ専攻生との共同作業によるバリエーションに富んだパフォーマンスになっています。

② 三回生以上が対象の学内の作品試演会。これは和声法・対位法クラスを修了した学生によるコンサートです。ソロから管弦楽作品まで自由な編成で演奏することが出来ます。作曲専攻生は演奏専攻の学生達との緊密な連係をもって，演奏実現までのプロセスを経験し，自分達の手で演奏会をプロデュースすることになります。

③ 三回生以上が対象の学外のホール（北文化会館・ウイングス京都など）で行われる自由なジャンルでの作曲作品演奏会。パブリックな新作発表コンサートのすべて（企画・制作・練習・宣伝広報活動・ホールでのコンサート運営等）を実務として経験することになります。このコンサートでの協力演奏専攻生達のパフォーマンスの質は非常に高く，京都の若き作曲家のプレ・デビューコンサートとして市民の人々に聴かれ育てられていくイベントとして定着しています。

④ 全回生対象の学内でのコンピュータ・ミュージックコンサート。ミュージックコンクレートの思想を作曲の基礎技法として取り入れ，続けられている実験的なコンサートで年2回行われています。

多くの発表の場があり制作した作品を実際にコンサートで演奏することが出来ますが，それらの活動プロセスのすべてを，学生自身の手で行っていけるよう，サポート等の工夫がなされています。

決してイージーな学生生活ではないのですが，現在様々な場で活躍している作曲専攻卒業生達から大学での実務経験はとても役に立っているということを耳にしている現役生達は日々忙しく，楽しく活動しています。

■声楽専攻

意識を集中させながら意識を多方面に分散させる。多面的，多角的に物事を捉える様に心を研ぎ澄ます。一見矛盾していると思える事を同時に行うことがオペラには求められている。緊張と緩和，この二つのバランスを上手く操りながら曲を仕上げていく作業。楽譜の中に潜んでいるそれぞれの心理，真理を探し出して具体的に身体を使って具現するのがオペラ。

今年の2月，芸大大学院オペラは20周年を迎え，何年かぶりに講堂を抜け出し，京都会館第2ホールに於いて，モーツァルト「魔笛」を，教員，OB，学生，賛助を含め，総力を上げて2日間にわたって演奏し，両日ともに大盛況となり，市民の皆様をはじめ全国からいらして頂いた聴衆の方々にとても満足していただいた。

芸大オペラが良いのは，1回生から少なからずオペラ公演に携わるところにある。演奏作品，出演者の数によって多少異なるが，舞台そのものを全員で盛り上げるのに一役かっている。1回生からオペラに関わる事により，オペラとはどういうものなのか，人と人が関わって舞台が創り上げられる事を知る。

舞台上で作品の本質「音楽」を具現する人達と，「裏方」と呼ばれる舞台には無くては成らない人達。みんなが「舞台」の元に集まる。毎年の苦心の「舞台」がまた現れる。

■ピアノ専攻

「ピアノフェスティバル」はピアノ専攻の学外コンサートとして，これまでに20回の演奏会を重ねてきました。本学の専攻別学外コンサートとしては最も長い歴史を持つもので，毎年5月から6月にかけて，市内のホールで開催されています。

そして「ピアノフェスティバル」は，ピアノ専攻学生にとって専門実技を学外で披露できる最大の場であり，勉学の大きな励みとなっています。市内のホールで一般の聴衆を前にして演奏することは，学生達がそれまで学んできたことを，実践的に体験する大変貴重な機会となっています。おかげで毎年聴きに来るお客さんも増えて，活気に満ちた演奏会が開かれています。

出演者にはオーディションで選出された数名が選ばれ，また場合によっては各種コンクール入賞者などの成績優秀者を加えて，充実した演奏会を行っています。またプログラムはピアノソロやピアノデュオを中心にバロック時代から現代のものまで取り混ぜて内容の濃いものになるよう目指しています。

日本伝統音楽研究センター活動事業紹介

日本伝統音楽研究センター教授　久保田　敏子

平成18年6月18日　「演奏研究」

平成18年8月3日　「伝音セミナー」

平成17年11月30日　「公開講座」

日本伝統音楽研究センターは，日本の社会に根ざす伝統文化を，音楽・芸能の面から総合的に研究することを目的として，2000年4月に開設された。当センターの主な研究活動事業は次の通りである。

(1)専任研究員の研究活動

所長以下6名の専任研究員は，各自が専門とする分野についての研究を行い，関連諸学会に大いに寄与している。詳しい活動内容については，当センター発行の「所報」に報告がある。

(2)非常勤特別研究員の個人研究活動

専任研究員の専門分野を補うべく採用された特別研究員は，センターでの研究活動事業の一端を担うと共に，個別研究に従事し，論文発表を行う義務を負う。

(3)センター主催の研究会の開催

研究会には3種類あり，原則として非公開であるが，その成果については出版物として公開することになっている。

一つは，より学際的な研究を目的とするプロジェクト研究で，本年度には2本のプロジェクト研究が実施されている。その一つは，「近代日本における音楽・芸能の再検討」のテーマで，昨年度立ち上げた研究である。今一つは，一昨年度からの続きで「教育現場における日本音楽」のテーマ。この研究の成果については，纏めを図書として出版の予定である。

二つ目には，専任研究員が主催する研究会で，本年度は次の3テーマで実施している。

①祇園囃子の源流に関する研究
②詞章本とその出版に関する研究
③演奏研究～地歌・箏曲～

このうち③については，研究者の他に，将来有望な各流派・芸系の若手演奏家も交えて，流派による伝承の相違に焦点を置いて，テーマ毎に比較楽譜を作成し，実演によって比較研究することを目的としている。なお，この研究会は，事前申し込みによる公開で行われている。

三つめには，各研究室が個別に行う小規模の輪読会や，研究会がある。

(4)市民向け公開セミナー

本年度は，各所から当センターに寄贈された貴重な音源の中から，「伝音セミナーSPレコードの音を聞く会」の公開セミナーを行っている。委託研究員の亀村正章氏の協力で，センターの研究員が交替に担当して，月一回のペースで行っている。日程等はHPに掲載している。

(5)市民向け公開講座

昨年度は「祇園囃子の世界」「京都で考える歌舞伎舞踊の動作と美学」「知られざる中尾都山の魅力その2～尺八の指導法と合奏法～」を行い，本年度は「仏教と雅楽～＜法会＞に触れてみる～」，「じょうるり西・東～義太夫節と常磐津節～」)，「地歌箏曲の楽しみ」を行う。

(6)学術出版物の発行

定期刊行物には

①『京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター概要』
②『日本伝統音楽研究センター所報』
③『日本伝統音楽研究』
④『日本伝統音楽資料集成』がある。

①は，文字通り当センターの概要を記した物で，和文と，英文の二通りの版がある。

②はセンターの事業報告集で，センターニュース，研究員の研究活動報告や，各種研究会，講座，出版物等の報告に加えて，エッセイや所長対談等の読み物も掲載している。

③はセンターの顔とも言える研究紀要である。査読付の掲載で質の高い内容には定評がある。

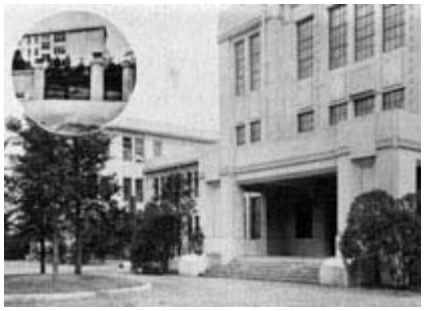
④は各研究会の報告書を兼ねた出版物で，昨年度は，第6巻『日本伝統音楽に関する歴史的音源の発掘と資料化』を発行した。

この他，随時出版物もあり，昨年度は『田邉尚雄・秀雄旧蔵　楽器コレクション図録』と，研究叢書1『都市の祭礼～山・鉾・屋台と囃子～』を出版した。

(7)電子メディアによる情報発信。当センター独自のホームページに各種の活動情報を公開し，所蔵資料についても公開している。

西京区30周年記念収蔵品展「秋季展」について

芸術資料館　松尾　芳樹



美術工芸学校絵画専門学校
今熊野校舎（竣工記念絵葉書より）

山﨑隆夫「向日葵」

「秋季展」

会　期：平成18年11月21日（火）
～12月17日（日）
9：00～16：30　無休

料　金：無　料

会　場：芸術資料館陳列室

芸術大学芸術資料館では西京区30周年記念事業として「秋季展」を開催いたします。

本学が現在キャンパスを構える大枝沓掛の地に移転したのは昭和55年，画学校創立から数えて100年を記念する年でした。今から25年以上前のことです。この移転地が決定するまでは，紆余曲折がありました。

はじめは，右京区大将軍坂田町の京都工芸繊維大学跡地が検討されましたが，取得することができず断念し，山科区勧修寺南大日町地区や伏見区桃山町地区などの候補地も検討されましたが，結果として選ばれたのがこの大枝沓掛町地区でした。それは昭和51年1月のことです。奇しくも西京区が右京区から分区したのはこの年の10月でした。実は，現在の芸術大学は西京区と歩みをともにしてきたのです。

この節目にあたる記念展示は，本年度の芸術資料館最後の展示となります。日本画，洋画と陶磁器作品を中心する，現代作家の作品を紹介して，しめくくりたいと考えています。一昨年本学を退任した山﨑隆夫氏の退任記念寄贈である「林檎」「向日葵」などをはじめ，木村嘉子「寂光」，市川正三「無言譜」の平面作品や，森野泰明「WORK 96-2」,宮下善爾「暗夜の虹」，石田有作「白磁花入・奈野168」の陶磁器作品など，本学出身の作家による寄贈品を中心とする約30点が公開されます。

これらの作品の制作者が卒業したのは，大学が東山区の今熊野日吉町にあった時代です。そこは国立博物館に近接し，智積院や三十三間堂といった一国の国宝たる文化財に囲まれた場所でした。大正15年に建設された東山時代の校舎は，幸いなことに，隣接する真言宗智積院の宗務庁となって現存しています。昭和45年の火災による被害がその雄姿を損なったことは残念ですが，今でも当時の有様に思いを馳せることは可能です。建設当時は市立の美術館もまだなく，校舎は帝展の会場にもなるなど，まさに京都の美術の中心となっていました。その東山の校舎からは今なお，遠く洛西の地が望めます。

現在西京区となっている，松尾，桂，川岡の三村は，もともと葛野郡に属しており，昭和6年右京区が生まれたときに京都市に編入されました。その後昭和25年に乙訓郡大枝村が，昭和34年には乙訓郡大原野村が右京区に編入されて，現在の西京区域が京都市となっています。竹林の間に展開する豊かな里山の景観も，昭和44年からはじまった洛西ニュータウンや桂坂の開発によって大きく変化しました。沓掛校地の魅力だった豊かな自然も，やがて失われてしまうかもしれません。会期中，西京区が主催する「歴史探訪スタンプラリー」(10月16日～11月30日)に，本展示は参加しております。晩秋の大原野の自然を堪能し，史跡に思いを巡らせながら，展覧会にも足を運んでいただければ幸いです。

美術学部卒業生紹介

土岐　謙次

「Latency－leaves #8（部分）」
2003　漆・ラピッドプロトタイプによる投光造形
297×246×210mm

「Latency－leaves #9のためのドゥローイング」
2003　インクジェットプリントに鉛筆
840×1190mm

1996. 3　京都市立芸術大学大学院漆工専攻修了
［受賞等］
1998. 1　京都府美術工芸展優秀賞
2002. 9　文化庁派遣芸術家在外研修員（イギリス）
2004. 1　ポーラ美術振興財団在外研修員（イギリス）

ここ数年で何度往復したことだろう。漆の作品なのにもっぱら活動地がイギリスというのも皮肉な話だ。主な活動のフィールドはハイブリッドプラクティスと呼ばれる分野である。これは様々なデジタル生産技術をクラフトの分野でも積極的に活用していこうという活動の呼称である。周知のようにイギリスでは様々なデザインの分野で世界の最先端の活動が行われている。一方で，ともに「生活の観察」という視点を母とする，デザインの二卵性双生児のような関係でクラフトも非常に熱い。大量生産品に疲弊した消費者だけでなく，製品の生産性や経済的合理性優先で素材への愛情を注ぐ余地が見いだせなくなりつつあるプロダクトデザイナーからも注目を集めている。こうしたいわゆる外部からの興味にコミットするための共通言語として，デジタルツールの果たす役割は計り知れない。漆に興味を抱く人たちに向けての展覧会は過去にも行われてきたが，より広範な分野の人たちと漆をキーワードに交流する活動を続けている私にとって，この分野に身を置いていることは完全なる必然である。ここでは素材を使った表現技術に対する自由な発想が盛んに試されている。ここでいう自由な発想とは，時代の流れに応じて物作りに変革をもたらす最良の手段や，創造的，技術的進歩を獲得するための最善の方策として捉えられており，もっとも素直な態度として深く人々の心に根ざしている。つまり未来を見据え，今，歴史を刻んでいるのだ。そこには異分野間相互の尊重と理解があり，けっして全体主義的な制度としての「工芸」や「クラフト」への懐古的な概念に拘泥していない。そんな心地よさがこのタフな往復生活を支えているようだ。

音楽学部卒業生紹介

菊本　和昭

『2003年・第72回日本音楽コンクール』での演奏。第1位・増沢賞，E. ナカミチ賞，聴衆賞を受賞。

京芸を卒業して2年目の私，菊本和昭の近況報告をさせていただきます。京響に入団して3年目の今年，なんとかオーケストラに慣れ始めた様です。本当にこの3年は，来る日も来る日も次の仕事の譜読み，音源を聞きスコアを読む…といった日々でした。給料の大半はＣＤとスコアに消えて行ったような気がします。京響では主に2番奏者として活動していますが，たまに1番を吹く機会をいただいたり，しばしば他のオーケストラに客演首席として呼んでいただけるようにもなりました。そんな中，地道に続けてきたソロ活動の方でも一つの結果を残すことができました。今年8月に韓国済州島で行われた「第4回済州ブラスコンペティション」に於いて，第2位(第1位無し)という結果を収めることができました。昨年から国際コンクールに挑戦し始め，(昨年はフランスで，最終予選まで残ることができました。)今年，このような結果が残せたことを大変嬉しく思っております。これもひとえに支えてくださった皆様のおかげでございます。しかし，これに満足せず年齢制限に引っ掛かる5年後まで積極的に国際コンクールに参加し，様々なことを吸収していきたいと考えています。あとはアンサンブルですね。学生の頃の同級生中心で結成した金管五重奏で活動しているのですが，皆のスケジュールが合わなかったり，そもそも仕事がなかったりするので，こちらの方はこれからというところでしょうか。なにはともあれ，皆様のおかげで充実した日々を過ごすことができています。これからも京芸の名を汚すことないよう，オケ，ソロ，アンサンブルとバランスよく活動してまいります。

音楽学部長紹介

音楽学部長／音楽研究科長　呉　信一

呉　信一

緑豊かなキャンパスの中，いつも元気な学生の姿に微笑ましくなります。

私は，朝比奈隆のもと大阪フィルハーモニー交響楽団で20年間首席トロンボーン奏者を務めてまいりました。その後，この大学に講師として来るようになって15年が経ちます。

着任当初大学に来て感じたことは，学生のレベルの高さです。しかし，プロになるにはまだ充分とはいえない面もありました。そこで，学生の持てる力をさらに伸ばし，将来プロとして活躍できるように，この15年間指導に力を注いでまいりました。

今日では大学会館や新研究棟が建設され，大学構内は私の着任当初とは随分様変わりしております。しかし，今も昔も変わらないのは，学生の若さ溢れる力，何事にも臆することなく挑戦する姿勢です。私は常々より世界に羽ばたいてゆく人材を育成したいと考えております。そのためにはまず，学生に勉強し易い環境を提供することが必要です。そして，学生が様々な事に挑戦し，多様な経験を積み，素晴らしい人材に育つよう今後の指導に当たっていきたいと考えております。

「響／都プロジェクト　京芸ルネッサンス2006・コンサートシリーズ」は，昨年に引き続いての取組であります。このプロジェクトは「オーケストラエモーション」「テーマコンサート」「セレクトコンサート」を三つの柱に，数々のコンサートを繰り広げ，成功してまいりました。今後も，より多くの方に京芸の魅力を知っていただくため，三つの柱を基本にさらに意欲的に進めてまいります。

京都市は日本で唯一，京都市立の芸術大学と交響楽団を持つ芸術文化都市です。その恵まれた環境の中で，我々は京都ならではの音楽文化を世界に発信していきたいと願ってやみません。

敦煌学と日本伝統音楽

日本伝統音楽研究センター所長　吉川　周平

吉川　周平

９月に敦煌に行き，憧れの莫高窟を見学した。敦煌研究院の樊錦詩院長にお会いして，一般に公開されている窟の他に，研究員が鍵を持っている有料窟と，院長の特別な許可がないと見ることができない警備員が鍵を持っている窟も，無料で拝観することが許された。

私が４年前に着任した日本伝統音楽研究センターは，日本の社会に根ざす伝統文化を音楽・芸能の面から総合的に研究することを目指しているが，日本の伝統音楽や芸能は，美術を含む様々な要素から成り立っており，私は有形の美術にも強い関心がある。

樊院長は考古学出身でフランスに留学されたと聞くが，敦煌の壁画や彩色された塑造は，単に仏教の資料というだけではなく，描かれた図像は当時の社会の様々なものを，具体的に示す資料として貴重であり，敦煌学にはすべての分野が包含されると言われた。

「日本伝統音楽」という言葉は，考察の対象を明確にするために，民族音楽学者の小泉文夫氏が提唱したものである。箏や三味線などの近世に生まれた「邦楽」だけではなく，日本に渡来して長い伝統を持つ古代からの雅楽，中世に生まれた能楽などの芸術音楽ばかりではなく，民俗音楽の民謡やわらべ歌などを含む広範な音楽が対象だ。廣瀬量平初代所長も，こうした広い視野に立った研究の重要性を説いておられたのである。

京都市印刷物第183113号

時を超え 美しく
ひと輝く歴史都市・京都